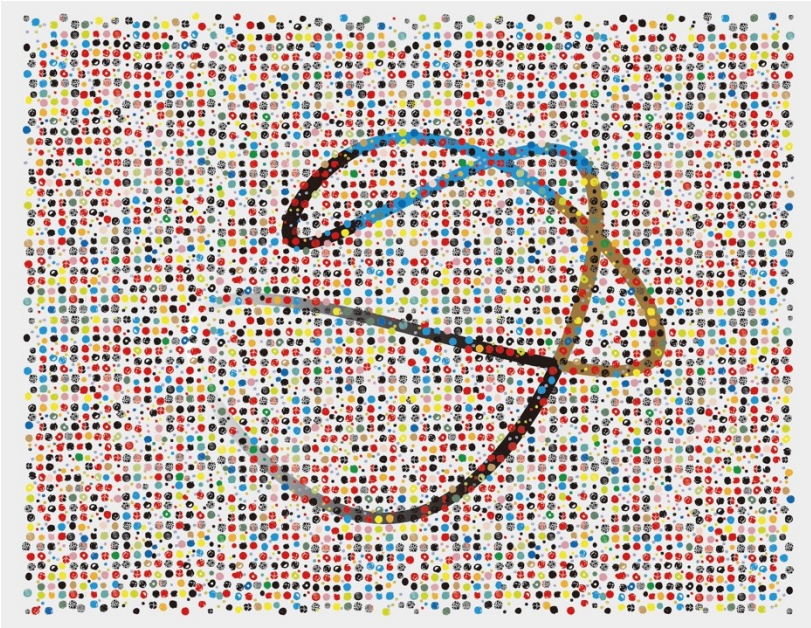
詩誌 立彩

Rissai: A Journal of Poems



第 25 号
2024 年 3 月

目次

伊東友乃
春になる　2
野に連れて　4
関根全宏
それ以外の断片　6
ぼくらがどんなに見つめあっても
——ブローティガンによせて　8
空港へ向かうタクシーで　9
瀧澤愛美
残像　10
夜の道　12
原奈都乃
打ち勝つことのできない君　13
清水みほ
住所ぼく　14
おっちゃん　16
永松佑香
豆腐メンタル　17
灰色の湖の姿　18
太陽と月の愛情表現　20
渡辺信二
ソネット3篇：ひまわりを追って　22
表紙原画
鈴木順三
「ぼくはここにいるよ1」（表紙）
「ぼくはここにいるよ2」（裏表紙）

春になる

伊東友乃

もう晴れたのかい？と雲が聞いて
もう晴れたよと海が答える
あいだに横たわっているこの
あたたかな空気は
春のものなのかい？と雲が聞けば
それは大地に聞いてみれば分かると
海が答えて
それから雲は
いくつにも分かれて動いてすすんだ
砂浜が見えて
樹々が見えて
ピンク色の大地があらわれはじめる頃
あたたかな空気は
湿り気を帯びて
いつのまにか雲も
雨を降らし
大地に緑色の絨毯がひろがりつづけ

冬でも
春でもなんでも良いような
うっとりとした気持ちで雲は
さらに雨を降らし
雲はもう
春そのものだった

野に連れて

伊東友乃

こどもは駆けてゆく
家を出るまえに　ふと何かを
忘れたようにポケットを探りながら

世界が夕やけに染まるまえに
急いで
眩しさの中に
いつまでも続く鼻歌を
野に連れて

ずっと遠くを見つめる眼差しを
一瞬こちらに投げかけて
笑い
そして
軽やかに去ってゆく

いま　こどものいない家は

不在の影がとけこみ
暗さがふかくなる

窓の向こうの
ハナミズキの葉が
きれいに揺れている

それ以外の断片

関根全宏

ホテルの二階のラウンジには
大きな窓に面したカウンターがあった
そこでぼくはメールを二通書き
彼女は隣で本を読んでいる
窓越しに見える通りは
車も人も思ったより多く
白い帽子を被った金髪の女性が
バックパックの男性と信号待ちをしている
その後ろ姿は　何かに折り合いをつけようと
しているようにも見えた
こどもをのせた自転車が通り
FedEx のトラックが通る

ロビーの宿泊客は途切れることがなかった
ぼくの左側に座ってきた女性が先にいなくなると
カウンターは再び二人だけになった
すぐ後ろの席には若い女性が二人

ナッツの音を弾ませながら未来の話をしている
三台目か四台目のバスが通ったが
行先は全部同じだった
彼女はまだ本を読んでいた
ぼくの左側に　別の宿泊客が二人座り
一人はキャップの上にサングラスをのせていた

メールの返信が一通届くと
ぼくは空になったコーヒーカップを手に席をたった
すべてが断片で成りたっていて
ぼくもそのひとつにすぎなかった

ぼくらがどんなに見つめあっても
――ブローティガンによせて

関根全宏

ぼくらがどんなに見つめあっても
きみの眼に映るぼくを
　　ぼくは一生知ることはできない
　　きみが聞くぼくの声もね

そんなあたりまえのことを
　　ぼくは詩にしたくなったんだ

空港へ向かうタクシーで

関根全宏

二十分遅れでやってきた彼は
タクシードライバー歴八年
　路肩に止まる車をよそに
　一緒に暮らす猫の話をしたとき

彼がみせたあの笑顔の横顔は
　ぼくの好きな映画俳優のようだった

残像

瀧澤愛美

目を離した一瞬で
魔法が解けたように
あなたの姿は変わってしまった
ゆっくり神経が蝕まれていき
意思に反してここまで来た瞳は
残った記憶をかき集めて
過去と目の前の私を照らし合わせる
あの家で遊ぶ子供の頃の姿が
まだ瞼の裏に映っているのだろう

その光景に浸りながら
話しかけるあなたの言葉に
いつもは逃げたいはずなのに
今は温かくなり寂しくなる
どこまで戻っても届かない現実
それでも変わらない断片と一緒に
消えそうで消えない遠い記憶として

いつか私はこの日のことを
形を持たないで思い出すのだろう

夜の道

瀧澤愛美

全てが私たちのものだったあの瞬間
顔に当たる冷たい風や
付きまとう暗闇にさえも
私は包み込まれていた
いつもは冷たい暗闇から抜け出すために
足早に歩く夜の道は
君が隣にいると
名残惜しい景色に変わる
あちこちに散らばる光は
私たちの行き先を照らし
静かな空間が
周囲の時間を止める
振り返ることなく
ゆっくり歩き続ける夜の道は
いつもより満ち足りていて
永遠に終わらないと夢見ているけれど
また人の気配が戻ってくる頃には
寂しさを感じる暗闇へと変わる

打ち勝つことのできない君

原奈都乃

私にとって君の機嫌を
取るのは難しい
もう２２年生きているけど
上手く操れたことなんて
一度もない
君は私が忙しくて忙しくて
たまらない時や
暑すぎる時
寒すぎる時に
やってくる
遠足や運動会、旅行
肝心な時にやってきたことも
あったよね
もうちょっと君の機嫌を
取ることが出来たらなんて思う

住所ぼく

清水みほ

ぼくに住みつくコイツ
ぼく出身ぼく育ちだけど
住みつく許可をした覚えはない
契約書なんてどこを探しても見当たらない

コイツは気まぐれなんだ
ある日は遠くに住むあの人を
ある日は過ぎ去った甘酸っぱい時間を
ある日はもう会えないあの人の笑顔を

気まぐれに振り回されてうんざりなんだ
でもぼくはコイツに
温もりを教えてもらった
痛みを教えてもらった

この先も住みつく許可は出さないけど
いなくなることも許可しないんだ

まだ知らないことがたくさんあるはずなんだ
もう少し気まぐれに付き合うか

おっちゃん

清水みほ

ぼくはただのおっちゃん
仕事帰りのビールとたこわさが好きな
ただのおっちゃん

でもぼくは年に一度だけ
赤い服を着て大仕事をする
ただのおっちゃん

寒くなるのと同時に
みんなが待ち焦がれる
ただのおっちゃん

今年も一仕事してくるか
終わったら白い髭も赤い服も脱ぎ捨てて
こたつで乾杯だ

豆腐メンタル

永松佑香

少しお箸でつつくだけで
ほろり、と崩れる
少し動かしただけで
ぐにゃり、と沈む

少し揶揄われただけで
ほろり、と崩れる
少し叱られただけで
ぐにゃり、と沈む

そんな豆腐みたいに脆い僕のハートは
まさに豆腐メンタル
崩れる前に誰かすくってくれないか

灰色の湖の姿

永松佑香

その湖はいつも霧が掛かっていて、
皆は口を揃えて言う
不気味だ、と

ある少女は考えた
湖は良く見えないから
不気味だと言われるのではないか、と

彼女は良く晴れた日の満月の夜に
そこへと足を進めた
たどり着くと霧は無かった
彼女は息を飲んだ

目の前にはターコイズブルーの湖
真珠を散りばめたような光が水面を漂っていた
どこか寂しさを纏っているように
月夜の明かりがベールのように見え

それが本心を隠しているようで
より一層儚げな空間をもたらしていた

彼女はすっかり湖の虜になっていた
そして心に決めたのだ

この湖の美しさは私の中に留めたい、
私だけ知っていればいいのだ、と

太陽と月の愛情表現

永松佑香

僕は君を輝かせることが出来るけど
君の魅力には誰にも勝てないだろう
凹凸のある素肌
自分では輝かない儚さ
あまりにも消えてしまいそうだから
僕が君を照らすのだ
君が微笑むと星が零れ落ちそうになる
君は熱いと愚痴を零すけど
それすらも抱きしめたくなる
これは僕にとっての最大の愛情表現

私は一人で輝くことは出来ないけれど
あなたの魅力には誰にも勝てないでしょう
飾らないその存在感
いるだけで眩しいその輝き
輝けない私を守ってくれているかのように
見守ってくれている

あなたが微笑むと周りを照らす
私はあなたに愚痴を零すけど
それは心を開いている証拠
これは私にとっての最大の愛情表現

太陽と月の愛情表現は
どんなロマンス劇よりも煌びやかで
宇宙規模なのである

ソネット3篇：ひまわりを追って

渡辺信二

1

おそらく　とし子もひまわりも
そして　その兄も　究極において　融合する
その融合が　この世に生きた果報であろう

その者は　今日のうちに遠くへ逝き
あのものは　一夏のうちに向こうへ行く
そして　一日に　玄米四合と
味噌と　少しの野菜を食べる修羅は

田植えの時　田んぼの真ん中に
ひまわりの種を一つぶ植えた
それが　真夏に　みごとに　花を開き
無数の稲たちを　輝かせる

このように　心身を戒め　他者のため
おのれの日びを　一念三千の詩法に捧げた
あの兄も　火の如く　逝った　逝って久しい

2

今ここに咲き誇るとき
それは　永遠の生命を祝うとき

風が纏わろうと
花びらを散らすことなく
雲が大陽を遮ろうと
顔色を変えることなく

ただ　遠く
子どもたちの歓声に頷く

それは　彼ら彼女らの
無関心を喜び
小さい五体の躍動を
みずからのものとするように

ひたすらに葉先を伸べて　花びらを開く
即身にして　ひまわりとなる

3

今も　鳥が二羽
かつての神がみを求めるかのように
高く低く　黒い塊となって
太陽へ向かって　飛翔してゆく

その後を　なお二千年前と同じく
若い女性が　身をやつして
海づたいに追ってゆく

まるで　鳥たちが
愛するものの行き先を
知らせるかのように

ついに倒れると知りながら
彼女は　なお　足をひきずってゆく
その先に　今も
涅槃があると信じて

寄贈詩誌・詩集等は下記『立彩』編集室宛てにご送付をお願いできれば幸いです。

〒173-8602
東京都板橋区加賀 1-18-1
東京家政大学人文学部　関根全宏研究室気付

2023 年 8 月 1 日から 2024 年 1 月 31 日までに贈られた詩誌等一覧

詩誌

『コールサック』115 号、116 号。
『白亜紀』167 号、168 号。
『りんごの木』64 号、65 号。
『万河・Banga』30 号。

詩集

ロバート・フロスト『山間の地に暮らして：ロバート・フロスト詩集』藤本雅樹訳、小鳥遊書房、2023 年。
硲杏子『残照・その後』土曜美術社出版販売、2023 年。
生井利幸『賢者となる言葉 三〇〇篇』コールサック社、2023 年。
藤田博『藤田博著作集 第一巻 全詩集Ｉ』コールサック社、2024 年。

その他書籍・論文・エッセイなど

網谷厚子『日本の詩の諸相』土曜美術社出版販売、2023 年。
阿部公彦『集中講義　夏目漱石――「文豪」の全身を読みあかす』 別冊ＮＨＫ100 分 de 名著、2023 年。
諏訪部浩一編『アメリカ文学入門［新版］』三修社、2023 年。
関西英米文学研究会『英米文学手帖』第 61 号。

詩誌『立彩』第 25 号　2024 年 3 月 20 日発行
頒価 300 円
編集発行　「立彩」
　〒173-8602　東京都板橋区加賀 1-18-1
　東京家政大学人文学部　関根全宏研究室気付
印刷　株式会社 DTP 出版　TEL 03-5621-4531